

《2024 年 4 月 公開サロン（通算 330 回）報告》

サロン 2002 を語ろう

—2024 年度のスタートにあたって—

【日 時】2024 年 2 月 27 日（火）19：40～21：20 ⇒ 終了後はオンライン懇親会（～23：00）

【会 場】オンライン（Zoom）

【テーマ】サロン 2002 を語ろう！—2024 年度のスタートにあたって

【参加者（サロンファミリー 8 名）】 ◎は NPO 会員、○は会員外のサロンファミリー

○磯和明、◎熊谷建志、◎小池靖、◎関秀忠、◎茅野英一、◎中塚義実、○野村忠明、◎本郷由希

【報告書作成】中塚義実

【概要（理事長より）】 ※3 月 26 日付「サロン通信 2024 年 3 月号」より

2024 年度最初の月例サロンは「限定サロン（参加できるのはサロンファミリーのみ）」のかたちで、サロン 2002 の現状と今後を語ります。初期のころからのメンバーも、2024 年度に新たにサロンファミリーになった方も、気軽にご参加ください。

「現状」については、2024 年度に導入した「会費ペイ」による会員管理システムの成果と課題、サロンファミリーとして何ができるのかを共有します。

「今後」については、まず 2024 年度の主な事業を確認します。そして参加者から、月例サロンや公開シンポジウムで取り上げたいテーマや演者、「U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ」の 10 周年（2025 年度）に向けての思いや希望など、自由に意見交換します。

4 月 16 日（火）に 2024 年度第 1 回 NPO サロン 2002 理事会を開き、上記について議論します。その報告を踏まえて、参加者全員で自由に意見交換できればと思います。

サロン 2002 のあゆみを共有しておくことも大切です。1997 年度に「サロン 2002」を名乗る前は、日本サッカー協会科学研究委員会（当時）の研究グループでした。日本のサッカー界、スポーツ界が大きく動きだし、インターネットが普及しはじめた初期のメンバーの「ネットワークをフットワークにつなげよう」というマインドが、サロン 2002 誕生の背景にあります。「歴史」を踏まえ、原点を確認したうえで現状と今後を語りましょう。

「言い出しっぺ」としてこのネットワークを取りまとめ、おもしろがりながら～っと仕切っている中塚が進行します。参加された皆さんが自由に、気軽にコメントできる場にしたいと思います。

終了後のオンライン懇親会も含め、年度のはじめを有意義に過ごしましょう！

注 1）通信トラブルのため開始が遅れ、スライドが投影できない状況下で開かれたが、本報告書にはスライドを一部掲載した。

注 2）冒頭、レコーディングできない時間帯があった。

はじめに

中塚：2024年度のスタートにあたって、サロンファミリー限定で意見交換する場を設けた。
おおむね次のように進行したい。

- I. 4/16 理事会報告ー2023年度の決算からみえるもの
- II. 2024年度へ向けてーディスカッション
 - 1. 公開シンポジウム①：U-18女子フットサルをめぐって
 - 2. 公開シンポジウム②：筑波大学附属高校蹴球部の近・現代史ー日本サッカーの躍進と今日の部活動
 - 3. 月例サロンのテーマ
 - 4. U-18フットサルリーグチャンピオンズカップをめぐってー映像制作に向けて
- III. サロン 2002の組織と運営ーできることとすべきこと

I. 4/16 理事会報告ー2023年度の決算案からみえるもの

中塚：4月16日（火）に今年度第1回理事会を開き、令和5（2023）年度の決算書の審議を行った。
まずはその部分について情報共有しておきたい。

年度末に大きな支払いが続く一方、2024年度会費の入金が当初の想定からずれたこともあり、資金ショートの可能性があった。月ごとのキャッシュフローの確認を怠らぬようにしておく必要がある。

茅野：資金ショートの話と財源不足の話は別ものです。新年度の会費が入ってくれば、現金出資はありますけれど、また来年度末になると大幅な赤字になるということになります。そこは分けて考えていかないと。

やはり部門別にどのぐらいの出費があるのかを見ないと、全体像がわかりません。理事会のときもそう思いました。何をどうしたらいいのかわかりません。月例サロンが赤字だというのなら、月例サロンの参加費を上げる話になるし、それにしてもサロンファミリーは無料なのだからいじってしょうがない。月例サロンはそもそもあまり経費がかかっていません。すると赤字が出ているのは出版物かイベントかのどちらかだと思うんです。

出版物の方は趣旨がわかりやすい。払う金額はわかっている。配布先があり、有償で配布しない前提だとすると赤字になるわけです。totoの補助金のときも議論したと思いますが、補助金自体は、委託事業じゃないから10分の10もらえることはあり得ない。当然、当会が負担しなきゃいけない部分があり、その負担分は会費から賄うべきものです。しかしどうもそのあたりの数字が合っていないんじゃないかなという気がしています。

あと、U-18フットサル大会の方はこれまた収支が明らかで、補助金があって自己負担分があるのですが、その出費分が賄いきれてない可能性がある。この2点になるのかなと思っています。

ここを改善しないと、NPOサロン2002の収支改善は考えられないですね。両事業でサロン2002が負担しなければならない部分は会費で賄わなきゃいけないので、負担額を超える会費を集めなきゃいけないという話になってくると思います。

資金ショートだけの問題であれば、決算打った段階で解決できるはず。特に未収金でなければOKだという話になるはず。そのあたりを見ていただければと思います。

中塚：事業ごとの収支をしっかりみていかないといけないということですね。

来年度に向けて本多さんとはいろいろ話をしています。U-18FLCCについては、大会期間を1日増やして試合数が増え、依頼する審判の数が増えました。運営面の負担が出てきているのは確かです。その部分で、参加費を上げることや、各地域リーグから帯同審判員をお願いすることなどを検討してい

ます。それに加えて一つ注意しないといけないのが、徐々にリーグ環境が整備され、「全国大会」に近づいてきました。現段階でも全国からチームを受け入れる「全国」大会ではありますが、まだリーグ環境に地域差がある段階での大会です。厳密な意味での「全国」大会ではありません。

これが、各地のリーグ環境が整備され、文字通り「全国」から選抜されてくる大会となるとスポーツ振興くじ (toto) 助成ではなくスポーツ振興基金助成となるようです。いまは5分の4の助成を受けていますが、基金助成事業となると助成比率は3分の2となり、持ち出しが増えます。U-18 フットサルをしっかりとささえ、この大会を育てていきますが、しっかりとすれば位置づけが変わり、助成金の種類も変わり、予算立ても変わってくるということを頭に入れておかないといけません。

II. 2024年度へ向けて—各事業について

1. 公開シンポジウム①

U-18 女子フットサルをめぐって

中塚：ということで、お金絡みのシビアな話からスタートしましたが、今日話したいメインのところに移ります。まずは今年度の月例サロンと公開シンポジウムについてです。資料をお見せできなくて申し訳ないのですが、お手元でメモをとりながら話についてきてもらえるとありがたいです。

公開シンポジウムは2回予定しています。時代のニーズを念頭に置きながら、サロン 2002 から発信できるものを、広く、多くの方に提供したいと考えます。

時期としては、夏休みの8月と、11月末の連休のころ。それを過ぎると報告書にまとめる時間が足りなくなってしまいます。そして、公開シンポジウムにつながるようなテーマで月例サロンを考えています。もちろん公開シンポと無関係の話題でもかまいません。月例サロンは本来、サロンファミリーが互いの周辺にある話題を出し合うのが原則です。あとは国内外のスポーツ界のタイムリーな話題を交えながら、今年度の月例サロンを構成していきたいと考えます。

まずは公開シンポジウム①についてです。U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップを柱に据えながら U-18 年代の男子フットサルの普及発展に力を注いできましたが、U-18 女子の方も少しずつ活性化してきました。協会や連盟といったオフィシャルな組織がトップダウンでドカンとやっていく前段ですが、現場から、あるいは底辺からのボトムアップで何とかしていこうという動きがみえてきました。東京や兵庫では女子の U-18 リーグがスタートしています。福井や埼玉にも熱心な指導者のもので活発に取り組まれているチームやクラブがあります。本多さんが長年取り組む神戸グリーンアリーナカップには女子の部があり、全国規模の大会として定着しています。その大会に毎回出場されている「丸岡ラック」の指導者が中心となり、U-18 女子の全国大会創設を JFA に働きかけているようです。

そんな機運を受けとめて、今年度の神戸グリーンアリーナカップの会場でシンポジウムができないかというのが、8月の公開シンポジウム案です。ちょうど男子の全国大会のきっかけが、2013年3月に名古屋オーシャンアリーナで開催した公開シンポジウム「U-18 フットサルを語ろう！」でした。8月1~3日の神戸で、U-18 女子フットサルに関わる人たちに来てもらい、次のアクションにつながるシンポジウムを開催したいということです。

これに関してご意見やご質問があればお願いします。

関：非常によい取り組みだと思いますし、面白いし、NPO サロン 2002 のコアな事業にあたるというか、本丸の部分なので、どんどんやっていくべきだと思います。

ただ先ほどのとの関係では、もし競技会の開催につなげていくとするなら、助成事業が一つ増えることとなります。4分の3の助成金を得るということは4分の1の負担が増えるということなので、こ

の部分をごどのように補えるのかを考えながら進めていく必要があると思います。題材としてはもちろん最高のコンテンツだと思います。

野村：僕も素晴らしい取り組みだと思います。女子フットサルに関わっておられる方たちがどのような意見や考えを持って活動しているのか、お話を聞きたいです。大切なことですし興味もあります。

中塚：想定している登壇者は、先ほども出た福井の丸岡ラックの方。女子のトップチームとアンダーカテゴリーのチームを持つフットサルクラブです。かなり熱心に動かれているようです。グリーンアリーナカップにもチームを連れてきているのでその方にはご登壇いただきたい。それと埼玉の武南高校の先生。私も面識がありますが、かなり熱心な方で、東京のU-18女子リーグに属しています。また武南招待フットサルを何度か開催し、筑波大学附属高校も招待されています。

武南の先生には「埼玉でチームを増やして埼玉リーグをやってよ」とずっと言ってきましたが、なかなか広がらないようです。このあたりの悩みも含めて語ってもらえると面白いでしょう。

女子の話なので、女性の指導者や選手上がりの方に来てもらえるといいですね。また協会や連盟の方にも登壇してもらいたいところです。

大会日程も関係するので、本多さんと連絡を取りながら進めてまいります。

2. 公開シンポジウム②

筑波大学附属高校蹴球部の近・現代史ー日本サッカー発展期と今日の部活動

中塚：もう一つのシンポジウムについてです。昨年11月末の公開シンポジウムは「日本サッカーのルーツを語ろう Part2」でした。5月の月例サロンもその続編の形で、サッカー導入期から大戦前までの日本のサッカーのすがたを、東京高等師範学校と同附属中学を中心に上げます。

今年11月ごろを予定している公開シンポジウム②では、100周年を迎えた筑波大学附属高校蹴球部の近・現代史を通して、Jリーグ発足、2002年FIFAワールドカップなど、日本サッカーの大きな節目にあたり、高校サッカーの現場で何が起きたのかを取り上げたいと考えています。

私が筑波大附属高校に着任したのが1987年度で、今年度で38年目になります。私は勝手に「近・現代史」と言っていますが、けっこう的を得た表現だと思っています。1986年に日本サッカー界でプロ選手登録が認められます。奥寺康彦さんと木村和司さんの二人です。1965年の日本サッカーリーグ発足からプロ選手公認までの日本サッカーのプロ化過程が、私の修士論文のテーマでした。

しかし選手はプロでも組織的にはアマチュアです。このままではいかんということで本格的なプロ制度導入への準備が進められ、Jリーグが誕生します。その前後に2002年FIFAワールドカップの招致活動が始まり、我々の研究グループの名称も「社心グループ」から「サロン2002」となりました。いまでは日本はワールドカップに常時出場できるようになり、日本のサッカー界は劇的に変化しました。さらに、サッカーが先駆的に取り組んだ日本のスポーツ環境の改革は他種目にも広がります。バスケットボールやバレーボールでもプロ化やクラブ育成が徐々に始まり、学校だけでなく地域に根差したスポーツ環境の整備が進もうとしています。

このような日本のスポーツ界の近・現代史に、中・高の部活動の現場の話を含めると面白いシンポジウムができるのではと考えています。一昨日の理事会では「筑波大附属高校蹴球部の近・現代史を語ろう」という、手前味噌なテーマでたたき台を提案させていただきました。理事会では「いろんな人が興味を持てるようなテーマ設定でやれば面白いのでは」というような意見がありましたが、身内に寄り過ぎるのはよくないですね。「筑波大学附属高校蹴球部の近・現代史」は、月例サロンで小出しにしていくほうがよいかもかもしれません。

ということで、皆さんからの率直なご意見やご感想をいただけたらと思います。

磯：先ほどの話も含めてなんですが、そもそも私は全体の運営がまだよくわかってないところがあり、そこからの話になります。大きな事業として公開シンポジウム、月例サロン、U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップがあるということだと思いますが、「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」という理念とのかかわりはどうなっているのでしょうか。つまり公開シンポジウムのテーマを選ぶときに、理念とどのように結びつけているのかということです。

それと、年2回の実施が想定されているようですが、冒頭にもあったお金の話が気になっています。理念と関連付け、かつ多くの人に興味を持ってくれるようなテーマは何なのか。ターゲットを幅広く捉え過ぎると難しいので、私も答えを持っているわけではありませんが、テーマを選ぶときの基準というのが、自分にはまだよくみえないところです。

中塚：法人化以前はもちろん、法人化以降もしばらくは、公開シンポジウムは年1回のイベントでした。月例サロンは“志”に沿って毎月やっていますが、公開シンポジウムは月例サロンの拡大版という認識です。告知・宣伝をしっかりやり、多くの人に情報を届け、来ていただく。来てもらえば、そこで次の繋がりが生まれます。そういう機会として公開シンポジウムをとらえていました。

そこにコロナがやってきます。いろんなことが激変しました。月例サロンや公開シンポは、会場に来なくてもオンラインで参加できるようになりました。交流の場としての公開シンポジウムの意義が薄れてしまった感はあるかと思います。一方で、toto 助成を受けるにあたり、「スポーツ教室、スポーツ大会等開催」の分類は事業規模が70万円以上ないと申請できません。我々のシンポジウムは諸経費を削ってやっているので、報告書を含めても、シンポジウムが一つだと70万円に届かない恐れがあります。そういう事情もあって、ここ数年はシンポジウムを2回やっています。

もちろん、無理にテーマ設定して2回にしているわけではありません。そもそも月例サロンで取り上げるテーマはすべて“ゆたかなくらし”につながるものですし、テーマの種はそこらじゅうにあります。サロンファミリー一人ひとりが持っているものです。あらゆるテーマがサロン2002の“志”につながるものだと考えます。そんな背景でいま年2回シンポジウムをやっているところです。

磯：ありがとうございます。そうすると、例えば私は少年サッカーのコーチをやっています。指導者目線でいうと、先ほどの近・現代史のシンポジウムが開かれるとしたら、“ゆたかなくらしづくり”との結びつきも含め、指導者としてはサッカーの近・現代史を知りつつ、いまこういう課題があり、未来に向けてこんなふう動いているという話を、例えばサッカー協会や外国のクラブの方から聞けるとよいかもかもしれません。

過去を振り返っていまの課題を見つめ、今後このようにといった流れで未来につながっていくと“ゆたかなくらしづくり”につながると思います。指導者目線だと、そういう話になると興味を持てるなと個人的に思いました。

中塚：ありがとうございます。シンポジウムの中身とも関係しますが、個人的には、近・現代史の中で、皆さんにどうしてもお伝えしたいことがいくつかあります。筑波大附属高校周辺からみえることです。たとえば高校生のリーグ戦を始めました。DUO リーグです。いまでは全国各地に定着しているリーグ戦文化のはしりです。U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップも同じ趣旨ではじめていません。日常生活の中にフットサルがある環境を作りましょうということです。リーグ戦を行う意義は、「DUO リーグの理念」に示しています。しかし何年か経過するうちに、「総当たり戦を行う」ことだけが独り歩きして理念がないがしろにされているのではないかと強く感じます。

リーグ期間がシーズンを形成します。リーグ戦を終えたらオフシーズンで、次のシーズンへ向けてのプレシーズンです。そこにはオフシーズンの過ごし方というのものもあるはずですが。サッカーのシーズンじゃないときは、バスケやりたい子はバスケをやればいいんです。マルチスポーツライフが可能となる環境づくりがリーグシステムです。こうした考えは、DUO リーグをはじめたころから JFA の機関誌の連載にも書いているし、いろんところで主張してきました。けど現場の指導者や関係者は、みんな張り切ってしまうんです、年間を通してサッカーばかりやってしまうんです。リーグ期間はどんどん伸びて、いまではリーグ戦に参加するサッカー部員はほかのことが何もできないようになっていきます。1月のフットサル大会にも出られないぐらいです。

これはあくまでも一例ですが、近・現代史を語りながら、言い出しっぺの私が思っていたことを改めて語りたいなというのがもう一方であるんです。

磯：お伝えしたいことがわかりました。

野村：面白いなと思いました。僕は精神科に通うようになってフットサルを知りました。精神科のデイケアでは、卓球やったり、ボッチャをやったり、いろんなことをやりながら、楽しいことがいろいろあることに気づいていくという経験をしました。いろいろ経験をすることが大切だ、マルチスポーツライフが実現できる環境についてお話されるのは面白いなと思いました。ありがとうございます。

中塚：私はそういうふうには考えますが、競技団体の中枢にいる人たちはそうは考えないようです。サッカー協会はサッカーを盛んにする協会なので、他のスポーツのことにはかまっていられないのでしょう。どの競技団体も同じです。そういうところが「アカン」と私は思うのですけどね。

そんな中で、いま部活動改革の動きが出てきています。部活動のあるべき姿についても盛り込んでいけたらと思います。盛り込み過ぎると訳がわからなくなるので、どんな方に来てもらい、どんなトピックを取り上げたらいいのかを考えなくてははいけません。場合によったら何回かに分けて、月例サロンで取り上げる方がいいのかもしれない、とも思っています。

これに付随して、あるいはこの続編みたいな形で、皆さんからアイデアを出してもらえればと思いますがいかがでしょう。

本郷：U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップの映像作成の話にも近いのですが、これはサロン 2002 と関わりのないような人たちに対して、こういう活動をしていることを伝える手段になる可能性があり、すごく意味があると思っています。できるかどうかはまだわからないし、できたとしてどこで上映するかもわからないけど、例えばサッカー好きじゃないけれど、映像が面白いと思って見る人がいるでしょう。全然触れる可能性もなかった人に対して、何をしているかが伝えられるようになるというなと思います。いままでやってきたトピックで、他のものでもそういうふうになればいいなと思います。筑波大附属高校蹴球部の話は範囲が狭いから難しいかもしれませんが、クラマーを呼んできた話とかサッカー史の話になると広がる気がします。実際にどうするのか難しいけど、例えば一般の人が読むような書籍になるとすごく面白い。

ちょっと夢見がちな話ですけど、そういうふうには何か形になるところに持っていくようなことも頭に置きながら、できると面白いなと思っています。誰が書くのか、ほんまにできんのかはあるかもしれないですけど。

中塚：Slack に投稿してくれたことですね。

本郷：目先のファミリーを増やそうとか、ツイッターやフェイスブックの告知を頑張ろうというものもありますが、それよりうまくいけば効果が高いと思っています。内輪に閉じずに外に広げてやっていることを伝えられるという意味で、そういうのも考えてみたいなど最近思っています。

中塚：ありがとうございます。本の形でまとめる話は、私自身、教員を辞めたらやりたいなど思っていることで、いくつか構想はあります。ライフワークにしていきたいとも考えます。これだけいろんな経験させてもらっているのだから、やってかないとバチ当たるなど思っただけ…。

サロン2002の事業として取り組む部分と、中塚義実が個人としてやる部分と、すみ分けというか時間の使い方も含め、これから考えていきたいというのはありますね。

ちなみに、学校の教員は今年度いっぱいと考えています。同僚の先生にも話をしたところでは。

3. 月例サロンのテーマ

中塚：毎月の月例サロンのテーマや演者について話を広げます。4月は本日の限定サロン、5月は大戦前の日本サッカー。日本サッカー史研究会の方にも連絡しており、何人か申し込まれています。大戦前のところでは、現時点でわかっていることとわからないことを改めておさらいしておきたいと思います。6月は総会後の意見交換会を限定サロンのかたちで行い、今日のような話の続きをしたいですね。8月と11月が公開シンポジウムだとするなら、7月、9月、10月があいています。

この夏、パリでオリンピック・パラリンピックがあります。守屋さんご夫妻が行かれるようなので、パリ報告をお聞きしたいというのはありますね。このほかタイムリーな話題はほかにもあると思いますが、以前から打診させてもらっていた野村さんには、ソーシャルフットボールの話をしていただきたい。また磯さんからご提案をいただいています。今日も時間があれば最後の方で話ができればと思いますが、去年から話題にされている、青少年をいかに育てるかという問題提起です。本質的な話だと思います。

サロンファミリーが関わる、あるいは抱えるトピックを披露していただくのが月例サロンの原点です。これらのお申し出はすごくありがたいことです。いつがよいのかも含め、今年度の月例サロンでこんなことを取り上げたらいいのではというところを、野村さん、磯さん含め、コメントいただきたいのですがいかがでしょう。

野村：まだまとめることができてない感じです。すいません。ただソーシャルフットボールを経験している人たちって、精神障害になって挫折を一度は経験し、リハビリを行うことで良くなったんですが、ソーシャルフットボールと出会って人生変わったっていう人ばかりなんです。だから、そういうことを発表できる機会をいただけるのはすごくありがたいというか嬉しいです。ちょっと時間がかかりますが、よろしくをお願いします。

中塚：一昨日の理事会でも、野村さんのこの件は話題にさせていただきました。アーティストの土谷さんはすごく興味を持っていて、土谷さん自身もアート系の活動の中で、ソーシャル関係の方々とつながりができているという話がありました。ぜひ野村さんに話題提供してもらいたいし、そのときはソーシャルものに関わるいろんな方に来てもらえるとよいですね。そうすればサロンファミリーの新たな広がりも見られるかなと思います。ぜひお願いします。

野村：ありがとうございます。

中塚：いつ頃が可能でしょうか。秋口という感じですか。ではパリのオリパラ後をお願いします。

関：以前の公開シンポか何かのときに、ブラインドサッカーに携わるゴールキーパーの方がおられたと思います。ブラインドサッカーでは、目が見える方のポジションになっているんですね。ゴールキーパーは。

体験型で、我々もやってみることができるのであれば、座学のととは別にやってみる機会があつていいのではないかと思います。

中塚：以前、デフサッカーの体験を筑波大附属高校体育館でやったことがあります。言葉で指示ができないのがもどかしく、やってみてすごく面白かったですね。実技を交えた活動もしたいですね。

磯：いまのデフの話で、私の地元でデフフットサルの元日本代表選手がいて、偶然私のフットサルチームに入ってきて数ヶ月間一緒にやり、応援に行ったりもしました。声を出さないでプレーしてすごいなと思いながら見てましたけど、その人は私のチームを辞めてしまい、お子さんもいるんですけど、耳の聞こえない中でフットサルを楽しんでるかなって結構気にはなっています。そういう方が、こういうところで参加して繋がれたら面白いなとちょっと思いました。

中塚：ありがとうございます。磯さんが用意してもらっているトピックもここで披露していただきましょうか。

磯：簡単に言うと、これからの若い人たちが元気に育ってほしい、成長してほしいなと思い、それに向けて幼児の頃から小中高と、どんな環境があつてどういう体験をしていくとそれぞれが元気になっていけるか。このような話を、いろんな人とできればなと考えています。今日じゃなくていいんですが、お時間あれば、皆さんの意見を聞きたいなと思います。

たたき台のようなものは手許にあります。正解があるわけではないので、僕だったらこんなふうと思うよ、みたいなものを、いろんな人の思うところを出し合い、そこで気づきが得られたらいいなと思っています。

【次世代成長支援への初めの一步】

2023/9/30

■目的 社会でひとり立ちしていく25歳頃に、一貫したストーリーで必要な人間力等が身につく成長支援をしていきたい。

■方法 【1】～【3】を調査し多くの人の考えを参考に、【4】を考え実行し、同時に【5】を構築していく

【4】ゴールを目指した、年代別に適した経験・学び		【3】25歳頃に必要人間力等		【1】ゴール：人と共に、自分らしく 楽しく生きる【自立・自律】
コンテンツ例 一部キーワードのみ	理解力・身体・心等の発達段階 乳児・幼児 小学生 中学生 高校生 ~25歳	カテゴリー	概要	
スポーツ	サッカー バスケット ラグビー 運動基礎能力	基礎力	好奇心 挑戦力 (トライ&エラー) 遊び心 クリエイティブ たくましさ (心と身体) やりきる力 周囲との共創力	どのような環境においても しなやかにクリエイティブに 自分らしく 好奇心・共感力・共創力で 多くの笑顔を
文化	芸術 音楽 文学		自己理解・他者理解←許容力	
学び	キャリア教育 コミュニケーション リーダーシップ 仕事体験		知的能力的要素 社会・対人関係の要素 自己制御的要素	
遊び	様々な～ 開発		前に踏み出す力 考え抜く力でチームで働く力	
自然	ハイキング パラグライダー	健康	身体 こころ (自己肯定感、信頼感～)	
強化	フィジカル強化 メンタル強化 プロ育成 起業	目標を持つ 極める チームワーク 闘争心		ビジネス (起業) や スポーツ (ワールドカップ代表) 等、 特定分野でトップになる
【5】環境構築 (外部・地域・家庭等)		【2】想定される環境		
		2030年	2050年	2070年以降

記載内容は、いずれもアイデア段階のもの
今後、様々な方の考え・情報を取り入れ、整理していく

中塚：月例サロンでぜひお願いします。例えば7月あたりの公開サロンでいかがでしょうか。

磯：たたき台はあるのでいつでも大丈夫です。

中塚：早い方がよさそうな気がしますね。7月でお願いします。あとで日程調整しましょう。教育関係者はもちろん、少なくとも大人ならみな考えてもらわないといけないことですよ。

磯：幼稚園の保母さんとか、人を育てるところに関わる人に来てほしいですね。

中塚：そうですね。よろしくお願いします。

ほかはどうでしょうか。今年度こんなこと取り上げたら面白いんじゃないか、この人に喋ってもらったら面白いんじゃないかというアイデアの種の段階でも構わないのですが。

磯：いまAIのことがとやかく言われていますが、AIをスポーツで生かすにはどうすればよいのだろうと考えます。スポーツ観戦を楽しむ人は世の中にたくさんいるような気がしますが、スポーツ観戦でこんなところをみたら楽しいよということを取り上げてもらうなど、そんなことを思いつきました。

熊谷：いまおっしゃったことも含め、大学などそういうのを研究テーマにしている人はいないのでしょ。去年もこの時期に似たような話をした記憶があるのですが、若い研究者や野心を持って事業を起こそうとしている人に、月例サロンの場を活用してもらえたらと思うところがあります。大学に関わっている方や、若い人のゼミなどにテーマを与えて、何か発表してもらおうというような形です。深いものでなく、稚拙なものでもかまいません。大学生はこんな感覚なんだというものでもよいでしょう。サロン2002の初期のころは、そういうお話が結構あったと思います。大学のゼミのプレゼン代わりに月例サロンで発表してみても、ということがあれば面白いと思います。

中塚：そうですね。以前は「学生サロン」という企画も時々やっていましたね。修士論文をサロンの月例会で発表してもらうこともありました。

熊谷：8月の公開シンポジウムのときに筑波大学蹴球部の学生さんが大勢来てくれました。監督にも来ていただき、学生たちの取り組みをいろいろお聞きして興味がわきました。そういう人たちに発表してもらうのも面白いなと思います。

中塚：筑波大学の仲澤眞さんはNPO会員です。スポーツ産業論研究室の論文発表会には、私も名誉顧問として毎年行っていますが、学生や院生の論文テーマはけっこうおもしろいですよ。仲澤さんご自身もJリーグの観客調査を、リーグ創設期からずっとやっています。はじめはサロン2002の前身の「社心グループ」でした。スポーツ産業論研究室にはサッカー以外にもいろんな話題があふれています。Bリーグの観客の調査とかね。

最近では学生スポーツもホームアンドアウェーでやりはじめています。サッカーの関東リーグはもちろん、バスケットボールやバレーボールも、大学リーグはやっていますね。そこを対象とした観客調査もやっているようです。面白いなと思って学生の話聞いていますが、それをサロン2002でやってもらうのもいいかもしれませんね。

熊谷：仲澤先生の発表の会に参加させてもらったことがあります。学生の論文のテーマ紹介などもしてもらっていただければ面白そうだなと思いました。

中塚：先ほどのAIの話に戻るけど、テクノロジーがいろんな競技に入り込んでいます。採点競技の審判や、サッカーでもゴールラインテクノロジーやVARが導入されてきています。このあたりも改めて追いかけていきたいですね。そういうことを研究や現場で取り組まれている人もサロンファミリーにはいます。去年の途中から入会された阪南大学の赤阪修さんはレフェリーカレッジの卒業生で、審判やルールの歴史について研究されていますが、いまの審判がどのようなニーズに応えなあかんのか、VARも含めどのようなテクノロジーが採用され、試みられようとしているのか、その辺りも面白いですね。

熊谷：個人的には学際的なものがすごく好きで、シンポジウムのテーマにはそういうものを楽しみにしています。やはりそういうことを研究されている方や、いまアクティブにやろうとしている方、いま動かしている人たちの話を聞いてみたいと思います。

あと個人的にですが、徳田さんのバーが半年経ってどうなっているのかということにも興味ありますね。スポーツバーをやってみて半年後、ラグビーワールドカップでどれだけ盛り上がったのか。旅行業をやりにがらいまどのようにやっているのかなど、興味は尽きないですね。渋谷に住んでいる人がどういう行動するんだろうとか、見えてきたものがいろいろあるでしょう。個人の感想を聞くだけでも面白いと思っています。ざっとそういうようなことを考えました。

本郷：テクノロジーの話と少し重なるんですけど、いま、サッカーの分析官みたいな仕事をする人が各チームに入っていて、試合中リアルタイムで何かしているようなのですが、実際に何をしているのかがわかりません。おそらく筑波大蹴球部の分析担当の人たちや、東大でもいろいろやっているとお聞きします。そういう人たちがどんなことをしているのか、話してもらえると面白いですね。

中塚：いまGPSつけて練習やってるからね。

本郷：そうですね。あれ試合のときもつけてませんか。僕はJ1しか見てませんが、監督の前にiPadが置いてあって、何かしらそこに送られて来ているのだろうと思いますけど、何が送られているのか。細かいことは教えてもらえないかもしれないけど、何をしているのかは興味あります。ずっとAirPodsをつけているコーチもいるようですし。

茅野：神奈川クラブのメンバーの息子がドイツに行って、ドイツのナショナルチームの分析、40人ぐらいいるそうですが、そのスタッフを2年間やって、いま確か帰ってきてるはずなんです。そのテーマだったらドイツにおける分析のありようみたいな話はできるでしょう。やるやらないは別にして、いまどこで何やってるのか聞いてみます。

それからもう一つ。いま本郷さんが言われた背中につけるGPSは、僕の記憶だとラグビーが先で、大学あたりで先につけ始めたんです。GPSでは位置情報だけでなく、心肺機能なども全部測定しています。走った距離がどのぐらいで、どのぐらいのスピードでどれぐらいの疲労度で。だから交代させるということをやっています。練習中もちろんやってて、この部分を動かすと使えなくなるということも全部測定しています。サッカーはJでつけていますか。つけてないと思っていたけど。

中塚：GPSはつけていますね。首の後ろのところ。

茅野：走る分析もしていますね。お前の走り方はここがこうだとか、遅いとか早いとか、全部やりますもんね。それを語るのに誰か適切な人がいるかというのはよくわかんない。たぶん企業秘密なんでしょうね。

中塚：これにも歴史があって、このような分析を最初にやったのは、サロンファミリーの大橋二郎さんだと思います。日本フットボール学会の初代会長で大東文化大を定年退官されたと思います。JFA 科学研究委員会ではゲーム分析班の中心メンバーでした。

大橋二郎さんの修士論文は、1人の選手の試合中の動きを三角法で追いかけるというものでした。タッチラインの両端に2台のカメラを置き、2台のカメラで1人の選手をずっと追いかける。2人がずっとついてないといけないし1人の選手しか追いかけれられないのですが、1人の選手が試合中、どれだけのスピードでどこへ動いたのかが全部わかるというシステムです。もう40年ぐらい前ですね。私が院生のころ、はじめて参加したサッカー研究会で大橋さんの修士論文の発表があり、へーこんなことするんや、三角法ってサッカーで使えるんやって感動したのを覚えています。いまではそれが、複数のカメラやGPSを使って全部自動で出てきますからすごい時代ですよ。

いまの話でまた思い出しましたが、本屋でおもしろい本を見つけて読みました。『スカウト目線の現代サッカー事情』という本で、イングランドでスカウトをやっていた田丸雄己さんという若手が書いた本です。彼も日本に戻ってきているようです。

これまた先ほどのゲーム分析同様、いろんなデータを処理しながら、どの選手がどういう能力を持っているのか、いつ頃開花するのか、それを求めているチームとどのようにマッチングするかということを中心に詳細にやっているという話です。

ずいぶん昔、「社心グループ」で「サッカータレントの発掘方法に関する研究」に取り組みました。タレントを見出した各年代の指導者やスカウトにインタビューしたものをまとめる研究ですが、いろんな方へのインタビューはすごくおもしろかったですね。当時のタレント発掘は、みる側の感覚によるところが大きかったと思います。いまでは感覚よりもデータをフル動員して、漏れがないようにしているのは興味深いと思う一方で、つまらなくなってきたかもしれないと思いながらこの本を読みました。こういうテーマも取り上げていきたいですね。

4. U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップをめぐる映像制作に向けて

中塚：では本日最後のトピックに移りたいと思います。U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップに話は戻ります。toto 助成を受けて云々のところは冒頭申し上げた通りだし、ここにいる皆さんも関わってくださる方が多いのでイメージはつかめているでしょう。

今年の1月が第8回大会でした。あと2回で10周年です。見えてきたのは、この大会のステータスが間違いなく上がってきたということです。サッカー協会的に言うと、日本代表の強化にU-18年代は直結しており、この大会はタレントの宝庫なわけです。だから代表コーチやFリーグクラブの関係者がスカウトに来てくれます。U-18 フットサルリーグが地域ごとに整備されることを目指してはじめられたこの大会は、とても重要な大会になってきました。

もう一つは、数年前に千曲市で行った公開シンポジウム「温泉街をスポーツで盛り上げよう」が契機となっています。千曲市と良好な関係が築かれています。それは、この時代における地方都市のモデルとして、フットサルというスポーツがどう関わっていくかは面白いテーマだと思っています。つまり千曲市にとってもU-18 フットサル界にとっても、この大会はとても面白いものとなっています。

先ほど本郷さんが言ってくれましたが、映像として残しておきたいと考えます。サロン2002がこんなことをやっているという紹介でもあるし、千曲市側でもU-18 フットサル側でもいい。とにかくこれを記録として残し、メッセージを発信するものとして使っていきたいところです。

今年度の第9回大会では、いつもの予算に30万円を加え、記録映像を作ろうと考えています。さらに、totoとは別に日本財団の予算を申請し、2025年度にはちょっと大きめの予算をもらってしっかりした映像を、ドキュメンタリーになるかどうかはわかりませんが作ろうという話をはじめています。

これについて皆さんから率直なコメントを、ポジティブ、ネガティブに関わらずいただければと思います。

野村：映画になるというお話なので、何か一つの形になるというイメージかなと思います。自分が大会に参加するときはすごくしんどいというか大変な感じですけど、負けちゃってすごい悔しかったりすることも含め、終わった後に充実感があります。勝ったチームを映像に収めるのであれば違った感じになるのではないかな。勝利に向けて、スポーツを続けている感じなので、勝ちたいという気持ちで…。

中塚：そこなんですよね。競技をしているわけだから、勝利を目指して頑張ってるわけ、勝者が称賛され、敗者は残念という話になり、ドキュメンタリーもそういうタッチになっていくものが多いでしょう。U-18FLCCも競技会なので、勝敗の厳しいところは押さえておきたいけど、それだけじゃないんです。この大会の目的は、日常生活にフットサルがあるようなリーグ環境を整えようというところだから、競技会だけでなく、出場チームの日ごろの姿のようなところも撮りたいですね。

けど、ドキュメンタリーの中に全部入れてしまうと、おそらく相当お金がかかると思います。なので、各チームの日常の姿は各チームで撮ってもらう。そして、例えば今年度の大会では、各チームの紹介映像を会場のロビー周辺で流すことができれば良いなど。それぐらいの予算30万円なんです。それを踏まえて2025年度の10周年に向けてどのような作品を作っていくかは別途検討になります。第10回大会だけの記録ではもちろんなくて、第1回からこのように育ってきた大会ですというところ。最初の方は、おそらく試合映像と写真しかないと思いますが、それをうまく組み合わせた作品ができればと考えています。本郷さんどうですか。先ほどもこれについても発言してもらったけど。

本郷：これは土谷さんとも以前話したことがあるのですが、普段どれぐらい映画を見ているか、劇映画以外も見ているかによって、「映画」という言葉から受け取るイメージは大きくずれるなと思います。漠然としたイメージとしてですが、例えば競技会をメインに据えたドキュメンタリーだと、熱闘甲子園のようになってしまうかもしれません。方法としてはあるけれど、撮ってくれる人と、これまでずっと関わってきた中塚さんや本多さんたちがどういうのを作りたいかを話していく中で、いろんな可能性がみえてくると思います。例えば、競技会のドキュメンタリーだけど中塚さんや本多さんの思いが盛り込まれたもの。どういう思いでこの大会を作り、最初はどうで、その後どうなって、いまこうなってきたというように、時系列でフォーカスするもの。あるいは出場選手が喋る場面をたくさん盛り込んだもの。フットサルを競技としてやっている高校生年代がどんなことを考えているのかという記録になったり…。どこをフォーカスするかによって全然違ったものになると思います。僕は、サロン2002や中塚さん、本多さんが何を考えていたのかということ客観的な目で残すことに意味があると思います。競技会の記録映像というより、そういうのになった方が面白いなと個人的には思っています。

中塚：ありがとうございます。私も同じようなことを考えています。加えて、やはり地元の方々の思いですよね。地元というのは二つあって、出場チームの地元と、受け入れ側の千曲市の人たち。宿の人たちの思いとかね。そういうことがうまく盛り込めると、ただのフットサル大会というだけじゃなくて、副産物も含めた地域の財産としての大会という視点も盛り込めたら面白いなと思っています。

磯：本来の目的からずれるかもしれませんが、僕たまにインスタでストーリーズ、短い30秒ぐらいの動画とかダンスを見て面白いなと思ってチラチラ見てるんですけど、さっき言ったチーム紹介という意味で、映像の中にチームのメンバーが例えば2、3人でリフティングを楽しそうにやっている姿とか、短いショート動画でフットサルの試合以外に選手が楽しんでいる姿を見せるのがよいのではと思いました。

中塚：ありがとうございます。大会期間が3日間になったこともあって、今年の大会ではイベント①②を入れました。イベント①は千曲市長の挨拶から始まるオープニングセレモニーです。挨拶の後に、各チーム上限90秒で自分たちのアピールをしてもらいました。どこの宿に泊まっているのかもひと言入れてほしいとリクエストしたのですが、これが非常に面白かったです。地域性がうかがえて。西日本の連中は「ウケ」をねらうんです。こういうものの動画バージョンということですよ。各チームであらかじめ作ってもらい、どんなチームが、どんな背景で出てきたのかをお互いが知るということはすごく面白いと思いますね。それを今年度にやりたいし、10周年の記録映像にも入れていきたいと思います。ちなみに2日目のイベントは、上山田温泉の旅館組合の方々が「冠着太鼓」のパフォーマンスをしてくれました。これまたすごく良かったですね。

こういうことを引き続きやっていきたいし、記録映画にもフットサルの試合場面だけでなく、付帯イベントや交流している場面も入れたいですね。

他の方はどうでしょう。小池さんは3日目に実際に会場に来ていただきましたが。

小池：地元では新聞にも取り上げられました。大会中にお送りしたものだけでなく、1週間ぐらいしてからもう一つ記事が出ました。あの高校生たちはこんな人で、こんな大会があって頑張ってますみたいな記事でした。3日間にしたことで、イベントをやったことも含め、地域の行事としても定着しつつあるのかなと感じました。スポーツ好きな人たちだけでなく、地域の観点としても有意義な大会になってきたと思いましたね。

僕自身、試合映像は見てませんが、確かYouTubeで生放送されて、決勝は解説までついてましたよね。もう一度見る、あるいは全く知らない人が見るとしても、コンテンツとして十分付加価値がついたものが残せたという意味では貴重なトライだったと思います。

中塚：いま言ってくださったのは試合映像ということですよ。ありがとうございます。

リーグチャンピオンズカップもあと少しで10周年を迎えます。運営面や組織面でいくつか課題となっているところがありますが、競技会はしっかりやり、それに加えて記録映像をしっかり残していきたいと考えている次第です。

Ⅲ. サロン 2002 の組織と運営—できることとすべきこと

中塚：一昨日の理事会でも、NPO サロン 2002 の理事の役割分担をどうするかが議題としてありました。時間がなくてあまり議論はできませんでしたが、サロン 2002 の組織のあり方などについてご意見があればお願いします。本郷さん、熊谷さんから、まずはコメントをいただければと思います。

本郷：熊谷さんのおかげで「会費ペイ」という新しいシステムが導入され、2024年度の登録手続きが進められました。去年までは通帳とメールを突き合わせて、誰が入会の意思を示して入金したのかを確認するのが大変だったと思いますが、今年は割とそこの部分はスムーズにできたと思います。ただ

事務局側の作業としてはそれ以降も、メーリングリストの登録や削除、Slack 登録の手続きなどの部分で現時点では手作業で対応するしかない部分もあり、結構手間がかかりました。実際に作業してみて気付く部分も多く、想像していたよりも単純化しづらい部分もありました。例えば、会員登録情報をもとに ML や Slack の登録をする際に名寄せのキーとして使えるのはメールアドレスのみなのですが、継続登録だがメールアドレスが変わっているといった場合に少し面倒な手順が残りました。会員登録の際に名前も登録しますが、自由記述のためご入力含む表記揺れなどがあり、けっきょく人の目で対応確認する必要がありました。このあたりも整理して、なるべく属人的なところをなくし、誰にでもできるように整理して、誰かに渡せるといいなと思っています。みんなそうだと思いますが、本業が忙しいタイミング、それも波があるので、忙しくなるとそういう細かいやり取りやメールをするのが大変になってきたりします。1人でやるのは結構きつく、春日さんも岸さんも大変だったと思います。1人に頼るのでなく、何人かで連携してやっていくのがよいと思います。

外からは見えにくい部分かもしれませんが、今年度中に整理できたらいいなと思います。

熊谷：やってみて課題がいくつかあることがわかりました。来年度に向けてどう対応するのかというところを具体的に整理しないといけないところがあります。そこは引き続き対応していきます。

あとは広報面ですね。どうやってイベントを告知していくか。オンラインで人を集めたり認知させることを試みっていますが、やはり人づてで集めていく方法が一番確実で信頼性が高いです。オンラインで未知の人にリーチしていくのは、今はすごくお金がかかります。Facebook 広告も Google 広告も、この5年ぐらいですごくお金かかるようになってきています。いまのサロンの状況からみますと、そういうところに積極的に投資をしていくのはなかなかしづらいと感じています。

そのあたりを根本的にどうするのかというところは答えが出しづらいところではありますが、探している人にリーチしやすい情報の出し方を考えていきたいと思っています。

中塚：どうもありがとうございます。

本郷さんが Slack に書かれていましたが、理事会の中ではいろんな話をしています。それでも毎回時間が足りなくて、途中になって次回持ち越しの連続です。理事会メンバーで話していることをもっともっと NPO 会員同士で、あるいはサロンファミリーの皆さんとしていきたいと思い、今回こういう場を持ちました。普段からもっともっとこのような意見交換をしたいと考えます。

以前はサロン 2002 名簿という、個人情報満載の名簿があり、互いのことを知ったうえでコミュニケーションをとっていました。しかし名簿が作れない時代になり、せっかく 2024 年度のサロンファミリーになったのにお互いのこと全然知らない状態であるのがすごく勿体ないと思います。Slack に自己紹介を挙げてもらうことを促していますが、もっともっと工夫しながら、お互いが何をしている人なのかが見えるような形で今年度の活動を展開していきたいと考えます。

ということで、本日はここまでです。

残れる方はもう少し、飲み食いしながら話を続けましょう。私は今日はスマホなんですけど…。

以上

このまま久しぶりにオンライン懇親会。話は尽きない…